

津田昇平教話 第四六三話

令和四年四月八日 朝の教話

所作の
一つ
一つ
に
命を懸ける

おはようございます。令和四年四月八日の朝をお迎えすることができました。

今日はてんちかねのかみたいさい天地金乃神大祭の宵祭、前日にあたります。御大祭御祭典が明日の午後一時半から仕えられます。今日は夜に神様をお迎えするという、そういう儀式になります。宵祭になり、明日が御祭典当日、本祭、翌日の夜に、またお帰り頂くという後祭あごまつりになります。

今日は、神様をお祭りの前にお迎えするということになりますが、「神様をお迎えするにあたって、色々準備をさせて頂く」なんてことを言うんですけれども、実際のところは全て神様のお手間をおかけして、こち

らの希望に沿って神様を使って、そして神様に必要なものを用意してもらって、動きたいように動かしてもらって、必要なものを買わせて頂いて、「あれ買って」「これして」「あれさして」……ってまあ全部、おんぶに抱っこでね、神様に全部して頂いてる。なのでやっぱり、おままとやなあ……ということをもまだ思わせてもらいながら、今日の宵祭をまた麗わづいしく、つつがなくお仕えできましますようにと、来て下さる神様にまだお願いしてるんですもんね。かといって、それがないと立ち行かんですから、神様をお迎えすることも神様のお世話になって、来て下さるのもそうやし、準備させて頂くのもそうやし、儀式を執とり行うのもそうやし、何から何までお世話にならんと、何にもできないんやなあということ

とをまた、まあ当たり前のことなんですけれども、分からせて頂きつつ、神様にお礼を申さして頂いております。

祭典というのは、私は別に、お話は無くっても構わんと思ってるんですよね。日々のお話はできるだけ頂いた方がいいと思いますけれども、いよいよのところ、御大祭のメインというのは祭典そのもので、教話はなくてもいよいよ構わんとは思っています。良いお話であれば、まあある方がいいかなと思うんですけど、かといって、ないといけないなんて全く思っていない、むしろ御祭典だけというのでも、全然麗しいと思います。

麗しくお仕えされる。まあ祭典というのは、「無言の教導じゆんごう」と言いまし

てね。祭典そのものがお話なんですよ。教導なんですよね。教え導くん
です。氏子はその祭典を頂いて、また祭主の動き、所作、祭詞を通じて、
天地金乃神様に、また金光大神様に向かう、人間としてのあるべき姿、
天地の道理、「神の氏子は氏子らしゅう」という本来の生き方、立場、身
の程、身分、それをよう分らせて頂くということが大事なんですね。
それを忘れると、恩を忘れると言っても間違いないでしょうし、お詫び
もお礼もお願いもなくなっていくでしょうね。いずれは神様より上に行
くしかなくなるでしょう。だから、本来のあるべき姿、神様の前に額ず
くという、神様にお継りをするということ。まあ相手が人間でも、いよ
いよのときろ、「お願い申し上げます」という時はね、ほんとにそろもう、

ペターッて土下座とげざしてでも頭下げて、「お願いします。この通りお願い
ます」なんて、相手が人間でもやるべいらいですから、天地一切を司つかさどり、
何から何までおかげを下さり、ご無礼もお粗末も不行き届きもたくさん
あるのにお赦ゆるし下さって、また恵んで下さる、そのご慈愛じあい。お世話にな
らなければ、片時かたときも生きることができない、そういうご存在ごぞんざいに対して、
どんなことがあるうとも、神様に対して額ひれずいて、平伏して、神様を神
様として立て仰いでいくという、それが人間としてのあるべき姿です。
それを忘れるところから、めづりを積むと言っても間違いないです。と
いうか、それしかないでしょう。

それを御祭典の中で、人間はどうあるべきなのか、天地に対して敬虔けいけん

である、天地に対して畏敬いけいの念、畏怖いふの念を抱くということ、その本来のあり方を、正しくきちんと、この命、この身この心を神様に向けて、現していくということ。それが御祭典の一番大事なところで、氏子はそれを見て、感じ取っていかなくてはいけませんし、感じ取っていくものでしょう。だから所作一つ一つに命を懸かけるんです。これで教導になるわけで、喋しゃべって教導というのよりは、よほど重要なものですね。まあいよいよ言いましたら、口先ではいくらでも、どないでも言えますんでね。やっぱりいよいよのこのこの行動というのは大事です。まあどちらも大事なんですけどね。

「教祖様のお広前ひろまえの八足はっすくが非常に低かった」と近藤藤守ことどうふうじゅが伝えておりますね。難波なんば教会初代の近藤藤守先生。非常に低くても問題がなかったというのは、どんな時でも膝行ひざうづり膝退ひざうづりで、ご自身の腰が八足よりも高くなるようなことがなかったというふうに仰った。「金神こんじんの狸たぬきが這はいずり回まわってる」と、周りの人たち、近くの者たちが言ひつらうと、「這はいずり回まわる」「金神こんじんの狸たぬきが這はいずり回まわる」っていろいろのもひどい表現ですけれども、けれども這はいずり回まわるのがどこでも当たり前であれば、いちいち「這はいずり回まわる」「なんてことは言わないでしょうね。まあそれが普通なんですよ、どこの神社やろうがなんだろうが。そうではなく、この金光様は、どんなことがあっても神様のお供え物を前にして、つまり神様を前にし

て、立つ、目線を上にする、そういう不敬は決してなされなかった。法律ではないけれども、「天地の道理」という法律で言った時に、それは神様にする不敬罪ですよ。敬うことをしない罪になるわけです。そんな立場ではないという、その信心の根本のところから、どんなことがあるうとも、たとえ周りに笑われようとも、決して、膝行膝退ですね、正座の状態から少し踵を立てて、そして少しずつ膝で前に進んだり、後ろに下がったりする作法ですね。これは非常に、「神様に対して決して高くなりません」「神様の前では、私たちは下でございませう」ということを、この道理を、身をもってお伝えするためでもあります。教祖様はどんなことがあってもそうだった、と仰いますんでね。「だから八足は低くても問題な

かった」と近藤藤守先生は仰った。でも周りの者たちは、「這いずり回
てる金神の狸が」というふうにして言っている者も、たくさんあったん
でしょう。でもそこに教祖様の、この赤沢文治あかさわぶんじという男の、神様に対する
向かい方、神様が「生神いきがみ金光大神こんこうだいじん」というふうにして、「天地の神とちのじんと同根
である」とまで言われたこの一人の人間の信心の姿というものを、そこ
から感じ取ってるわけだね。そう思うと、私たちが目指すべきところは
教祖のこの信心、この赤沢文治という人間の、この男の信心を目標にす
べきであって、それは理屈とかそういう話やなくて、命全体で向かっ
ていく姿勢ですね。肉体を頂いてるんですから、この肉体を使わなけれ
ば信心はできないんです。

話せる、聞けるといっただけじゃない。動く、座る、立つ、唱える、これ全て、神様に対する敬意を表する。自分という人間は、天地金乃神様を前てんちかねのかみにして、ただただ恵んで頂くだけの存在、ただただご無礼お粗末をするような存在、ただただひたすらおすが継りしなければ、一瞬も生きることができない自分でございます。ただただありがとうございます、ただただ申し訳ございません、ただただお願い申し上げますという、その心を表していくのが御祭典です。

この御祭典では、麗うるわしく美しく仕えられるということが、一番大事なことです。それでもミスがあるかどうかというのは、そら分かりません。でもそれは、神様が許す許さんは神様の問題であって、こちら側の

問題ではありません。そんなこと、こちらが言う立場でもありません。それこそ偉そうなもんでね、許す許さんは神様の本分ですから、それは私たちの問題じゃない。私たちは神様に対してミスがないように、できる限り美しく、神様に対して礼を尽くしていく、礼儀を尽くしていく。これが人間としてできる最大限のことやろうと思います。まあそれでもご無礼お粗末不行き届きがある人間ですから、色々足りるところはあるでしょう。それを許して下さいっていうことはまあ承知してますけれども、許して下さいさるんやったら何でもいいんかといつぶんになつてくんですよ、これは大きな間違いですよ。そこにあぐらをかく、そしてご無礼お粗末不行き届きをしてしまう。それでもいいじゃないか、許してくれるん

やったら。許してくねるならそねでいいのかっていう問題になってくね。
まあけれども、度が過ぎると天地の道理にはかなわんですからね。ま、
神様は許して下さるでしょうけど、天地の道理は許さんでしょう。親で
すから、神様はね。自分の子どもがそら、盗人ぬすめしようが何しようが、そら
最後は親は「あんたアホやなあ」「言いながらでも許してくれるかもしれ
ませんが、まあお上かみは許しませんでしょう。牢屋ろうごに入ってもらわんと
あかんでしようしね。神様は許して下さるからといって、そこにまあ言
うたら安穩あんのおんとあぐらをかくというのは、私はもう間違っていると思いま
すし、教祖の信心とは最もかけ離れてると思ってます。

御祭典という場であれば、命を懸かけて、指先まで、目線一つまで、瞬まはた

き一つまで集中して、神様に向かっていく、命を懸けていくということ。
そうでなければ、御祭典っていうのは美しくなることはありませんね。そ
ら人に見せるんでも、演劇だろうがバレエ団だろうが、そら美しく見せ
ようと思ってね、お客さん相手でも真剣になって、指先まででも、そら
目線でもって、たかが相手人間に見せるだけでもその程度やってんねん
からね。発表会の方がよほど真剣やないかと思えます。いやいや、ここ
らは何から何までお世話になっている天地金乃神様に対して礼儀を尽く
すのは当たり前のことじゃないですか。それをやっぱりさしてもらうこ
とが大事なあとに思います。常日頃は、もうこちらもう無礼講むれいこうでね、裸はだか
だろうが何だろうが、トイシで用を足してようがね、もう自分の好き勝

手な時に好き勝手なように神様呼び出して、「ああして」「いじうして」「ああして」「いじうして」「いじうして、お礼もろくろく言わずにご無礼お粗末もう重なってるような、それでもまたお縋りして、上手くいかなかったら文句言って、神様を恨む者うらみだっている。そんなことしかしてないような人間。

だからせめて、御祭典の時だけべらいはせめてきちんと、礼儀を尽くすべらいのことはなしてもらわんといかなあと思います。普段の信心というのは、基本的にはね、まあ「ハシとケ」で言いましたら、ケの信心ですよ。ま、普段着の信心です。パジャマでもできるでしょうしね。うん、べいぢるべいぢょう。でもお祭りというのは、ほんとに神様の御恩を忘

れない、それを現していくということですから、きちんと良い準備をして、そして最高のものをお供えができるようにしていくというのは、まあ当たり前のことですよ。それを、私わたくしはもちろんのことですけども、祭員の者も、祭主が本来さしてもらうところを分けて頂いて、どうぞお分け下さいと願いがあって、それを分けて頂いて、微塵みじんでもお使い頂くとするのであれば、そこに祭主の方からわざわざ、自分が言わば奪い取ったわけだね。それを命を懸けずにええ加減にするっていうんであれば、そもそも教師辞めるべきでしようね。当たり前のことやと思います。しっかりと教師辞任してもらいたいですよ。それぐらいの覚悟かくごでやらなくてどうするんやろうかと思います。ただ祭典を穢けがすっていうんであれ

ば、辞めたほうがいいでしょう。するんであれば、命を懸けんとあきま
せんし、でも考えてみたら、こういうことでしか、神様に対してお祭り
で礼を表す、尽くすなんてできないですよ。どんなにお礼申しても、尽
くせることはないですけども、指先一つでもそうだし。お客さん相手に
もね、お金もらってんねんから、ええもん見せんといかんわと思って、
みんなそろもう、真剣になって朝から晩までお稽古けいこしてたりしはるでし
ようね。もう相手が人間はまあええとして、天地の親神様ですから、
金光大神様こんこうだいじんですからね、命の大恩人ですよ。その神様に対して、ほんとに
年に一度、月例祭げつれいさいで言ったって、月に二度ですよ。頂いているおかげから
考えたらもう、まあほんのちょっとしたことですけどねども、でもそこに、

こちら側のせめてもの思い、御礼の心を形に表していく、姿に表していく、この真心を受け取って頂きたく、真姿ますがたにしてお仕えさせて頂く、それが御祭典ですね。麗うつくしく御祭典が仕えられるようにと願ってやみません。

昨日は、「らしゅう、らしゅう、らしゅう」って話をしましたね。親は親らしゅう、子は子らしゅうという、神様の氏子うぢこなら氏子らしゅう、皆さんも信心して、遥拝たいがいでもされて下さい。遥拝たいがいでなくお広前ひろまへでお参りをさせて頂く、そういう時にでもですよ、御祭典じゃなくても、前後でも、その時でも御祭典の感覚でお広前に入らせて頂いて、きちんとご拝礼申し上げるとい

うことが、大事なことやなと思います。

ましてや神様に養って頂いてる、神様に誓いを、教祖様に誓いを立てた御道おみちの教師であれば、なおのことでしょう。しっかりと、まあ当たりの前のことです、教師は教師らしゅう、広前の守もりは広前の守らしゅう、祭主は祭主らしゅう、何事も「らしゅう」「せん」とあきません。後取しりとりは後取らしゅう、贄者ひんじやは贄者らしゅう、奉幣ほうへいは奉幣らしゅう。何でもそうです、らしゅうせんとはあきません。それをまあ、自分の満足というんではなくて、どこまで行っても本来的には祭主が満足される、それによって神様にご満足頂ける、まあそこまで行かんと本来ではありませんね。でなければ、ただ穢けがしてるだけになります。いやあ、そういうことがあっても

神様も金光大神様も赦ゆるして下さる、そういつといつにすくに逃げ込まず
に、もう最高のものを最善のものを最良のものをお供えさせて頂たまい、
この美しい所作しよをご覧下さい、この美しい小擲しゆをご覧下さい。この美し
い所作、目の動き、手の動き、足の運び、どうぞここに命いのちを懸かけますから
どうぞご覧下さいって、そこを見て、神様が御覧あそばす、金光大神様こんこうだいじんが
御覧あそばす。そして、「ああ、そうかそうか」と言いって、喜んで「
」して下さるんでしょう。そこを、これが御祭典の当たり前ですからね、
そうでなければ無言むごんの教導きょうどうなんて、氏子うぢこに対して背中を見せてね、導みちく
なんてできるはずがないですよ。まあ私わたしはこの御道の中で最も美しい
御祭典を仕えさして頂かなくてはいけないと、最もおかげを頂いている

お広前やと思っておりますから。

そういう御祭典に、皆さんそれぞれの立場で参拝させて頂ける、まあ参加させて頂けるといことは勿体ないもったいことやなあと思います。

親は親らしゅう、子は子らしゅう、何事もらしゅうせよ。

一理 I 中村弥吉なかむらやきち 二

なかむらやきち
中村弥吉さんの伝えですけども、この人のみ教えね、残ってるお伝えの中で、有名なみ教えもありますよね。

実意丁寧、真を尽くせよ。

一理 I 中村弥吉 三

っていう、まあ短いんですけれどね、「実意丁寧、真を尽くせよ」というご理解がございます。教典にありますね、「実意丁寧、真を尽くせよ」。「これが教祖様、私たちが頂いている、教祖生神金光大神様、赤沢文治という人間が、神様からほんとにね、「神からも恩人である」と、「氏子からはもちろんである。神からも恩人である」と、そこまで讃えられたこの男がした信心はどういう信心か。それは「実意丁寧、真を尽くせよ」と、それを尽くしていかれた、そういうお方です。それを私たちは、教祖様

として頂いておりますし、御道の教師であれば教師になる時に誓いを立てて頂いております。終生この御道の御用でね、立たして頂く、教祖様が歩まれた道を自分たちも歩ませて頂く、そういう誓いを立てて頂くわけですからね。この赤沢文治が見ても、「ああ、結構やなあ」と褒めても「ええ、結構やなあ、真を尽くしたなあ。ちゃんと届いてるぞ」と言ってもらえるような、そういう御祭典を麗しくお仕えでき、参っている氏子の御礼の心、ここまでおかげを頂いてきた氏子の心を、御祭典の中で祭員たちが、祭主のみならず祭員が取り次いでいく、伝えていく、それが役割ですからね、自分のことだけの話ではありません。氏子の御礼お詫びお願い、全て抱えて、それを引っ提げて、神様に向かっていく。自

分のこととか家族のことっていう、そういう小さいことではなくって、参ってくる氏子全てのこと、先祖も含めてね、全部のことを引っ提げて抱えて、そしてそれで天地金乃神様てんちかねのかみに向かっていくんです。それを背負っていくのが祭典というものです。しっかりと、麗しくお仕えされるように願っております。

どうぞ皆さんも、今日は夜の七時半に、お広前ひろまえで宵祭よひまつりが仕えられます。皆さんそれぞれ、ご自宅ごしんぜんでもし、家の御神前ごしんぜんがあれば、なければなくっても、御神米様ごしんまいを置いてでも結構です。夜の七時半になりましたら柏手かしなでを打って、「ああ今、尼崎のお広前に神様がお出まし下さるんだな、その御祭事ごまつりごとが仕えられるんだな」と、それぞれの自宅みせで祀まつってる神様、

御社も、この尼崎のお広前の、その神様のお徳が流れてるだけですから、その恩恵を蒙まかってるこのお広前が潰れたら、支流であるそれぞれの自宅の神様も基本的に全部途絶えると考えて結構です。だからこそ、この元になる広前の神様がお出まし頂くとということは、それに連なるそれぞれの各家庭の神棚かみだなに祀まつっている神様のお徳も、そこでまた現れるということになります。夜の七時半になりましたら、ご拝礼申し上げて、拝詞、そうですね、神徳賛詞しんとくさんごの一つでも唱えまして頂いて、できるのであれば、家族みんなで唱えて、そして御扉おひらを、ご祈念して開けて下さい。

はい、どうぞよいお祭りをそれぞれ頂かれますように願わせて頂いております。よくお参りでした。

了)



津田昇平教話 第四六三話

令和四年四月八日 朝の教話

令和四年七月四日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
